

『肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界く語りと神事く』

財団法人日本伝統文化振興財団

〈発売元〉ビクターエンタテインメント株式会社

二〇〇七・四・二五（本体五七一四円）

「平家」 演唱実態の現場へ

齋藤 英喜

六調子と呼ばれる琵琶の楽と少々高めの声に乗って『般若心経』が唱えられ、やがて琵琶が本調子に移ると、「そもそも日本は葦原国、天の浮橋に天の白鉾をさしおろし」という古代神話をもとにした祭文が続いていく。肥後の琵琶弾き座頭が新築儀礼などの場で語った「わたまし」という語りである。

兵藤裕己、ヒュー・デフェランティ・木村理郎の監修・解説による『肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界』は、この「わたまし」と「道城寺」をDISC1に収め、DISC2に「菊池くずれ」という軍記物、そしてDISC3の継子物の「あぜかけ姫」へと続き、最後に

琵琶の手だけによる「インストルメンタル」を収録した、全三枚組の構成となっている。全曲通して聴くと三時間を越えるものだが、それは「琵琶語りひと筋に生きた最後の芸人」と呼ばれた山鹿良之氏（一九〇一〜一九九六。芸名は玉川教演）の多数の演奏レパートリーの、ほんの一部ではない。だが、これだけでもわれわれは、「最後の琵琶弾き」の至高の芸を充分味合うことができるのである。

本CDデスクが、「わたまし」という祈禱儀礼の語りから始まるのは、琵琶弾きたちの芸が、荒神祓い・カマド祓いなどの神事のあとの祝宴で「余興」として繰り広げられたという演奏現場に即したものだ。琵琶弾きの芸は、なによりも宗教儀礼と密接に繋がっていたのである。この点について、「解説」のなかで兵藤裕己が重要な指摘をしている。「平家」などの語り物を演奏した中世の琵琶法師は、近世初期には新しい三味線音楽へと転向していった。時代の流行は琵琶から三味線へと移ったのだが、九州地方だけは、座頭の琵琶が江戸時代以降も続いた。その理由は、盲人の琵琶演奏が荒神祓いなどの民間祈禱と密接に結びついていたからだ。琵琶はたんなる楽器ではなく宗教儀礼を執行する「法具」でもあった。だから盲人の座頭たちは琵琶を手放すわけにはいかなかったのである。

こうした「法具」としての琵琶については、じつは「わたまし」の語りのなかに見事に描きだれていた。「わたまし」の演奏を聴いてみよう。

古代神話にもとづく国の始まりが語られていくと、やがてアマテラスの岩戸こもりのエピソードへと展開していく。そのとき、岩屋にこもったアマテラスを迎え出すために「シオン弁才天」が空より「鳴り物」を天降し給い、八百万の神々による十二の音楽が弾じられていく。その鳴り物の効力でアマテラスは岩戸

を開いた。そしてこの天降った鳴り物を「琵琶」と名づけ、その位はアマテラスの位と同等。その証拠に琵琶の左には月天子、右には日天子、五つのツボは二十五の観世音の威徳をあらわし、糸巻は天神の位、覆手の形は天の岩戸の形を字ばせ給う……。と、楽器としての琵琶は、多様な神々、仏たちが顕現してくる聖具となっていくのである。「わたまし」の語りは、琵琶の聖なる起源を語る神話でもあったのだ。

この「わたまし」の祭文に語られる神話叙述は、近年注目されている中世神話、中世日本紀ともリンクする、まさしく中世に読み替えられた神話世界である。一般に中世日本紀は王権の来歴と結びつくのだが、ここでは王権とは離れた、民間における祈禱の来歴語りとなっていく。それは中世神話の広がりを取り入れるに教えてくれる、貴重なテキストといえよう。

さて、こうした「琵琶」の聖なる起源神話を語ることで、琵琶弾きの盲人たちは、民間の祈禱を担う宗教者であり、さらに語り芸を演奏する芸能者でもあるという、まさしく両義的な存在となっていく。いや、両義的という理論で説明するよりも、われわれはまず宗教者や芸能者という近代的な区分が通用しない、琵琶弾き座頭たちの語りの現場へと降り

立つべきだろう。「肥後の琵琶弾き 山鹿良之の世界」のCDデスクは、冒頭最初の演奏世界から、われわれをそうした現場へと導いてくれるのである。

なお「わたまし」という言葉は、陰陽道儀礼の「移徙法」にもとづき、中世後期以降に修験や法者、太夫たち民間宗教者に広まったものだが、琵琶弾き座頭である山鹿氏は、これを「ワ（琵琶の琵琶）魂だ。琵琶でタマシイを入れることだ」解説と説明している。強引な語呂合わせだが、しかしそこにこそ芸の実践者自身による解釈言語を見てとるべきだろう。それは「琵琶」の由来を岩戸神話に結びつける神話解釈とも呼応する発想である。

肥後の琵琶弾き座頭の世界。それは宗教者とか芸能者とかに区分できない、まさしく中世的な存在であった。われわれは、ここに近代的な二分法が通用しない世界を見出すのだ。この二分法が通用しない世界ということとは、琵琶弾き座頭にとって、文句とフシの関係にも通じている。兵藤は山鹿氏の演奏現場から次のような実体験を述べている。山鹿氏から「文句についての聞きとり調査にしても、文句だけを（フシをつけずに）聞きだすのは、ま

フシに関する説明を求めても、説明は特定の外題に即してきわめて具体的に行なわれる」。そしてここから「口頭的な語り物の伝承者にあつて、語りのことばは、文句／フシの未分

化な複合体として、すなわち声としてしか存在しない」（『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館、二〇〇〇年）という「声」の現場が見されていく。座頭たちにとって、語り物の文句は、そのフシと一体となることで、はじめて記憶することが可能だったのである。それゆえ、たとえば演奏時間が一時間近い「あぜかけ姫」の物語も、その内容・文句を丸暗記しているのではなく、様々な場面に応用可能な（七五調一句程度の）慣用句があつて、様々なレベルの語りの「ストック」をもとに、その時その場に応じた語りが構成されるという、長時間の語りの秘密が解き明かされていく。その秘密は、D I S C 3 に収録された「あぜかけ姫」の語りを聴いていくと、なるほどと納得させられよう。

山鹿氏は晩年になつても、自宅に多くの人を招き、琵琶を語り聞かせ、その頭のなかには二百段以上の外題が詰まっていたという。「最後の琵琶弾き」の賞賛は、けっしてたんなるキャッチコピーではなかつた。その「芸人」

としての力は、数十年にわたる同業者仲間との交流のなかで、自分の知らない外題を金を払って教えてもらい、また手持ちの外題と交換したり、あるいは演奏の場に同席してひたすら聞き覚えたり、自分のレパートリーでも他人の演奏を聴いて、適宜語り口の修正を行なったなどという、まさしく修練の蓄積の成果ということになる。

こうした芸人としての修練は、当初は師匠について、師匠から習い覚えるものであったが、師匠と弟子の関係をめぐって兵藤は、興味深いことを述べている。弟子は師匠のもとに年期奉公に入るのだが、年期があけないうちは、弟子が勝手に独立しないように、親方は最低限の出し物しか教えなかった。師匠は出し惜しみ、教え惜しみをしたのだ。したがって弟子が自分のレパートリーを増やすには、聞き覚えによって師匠の芸を盗み取るしかない。弟子と師匠とのあいだには、つねにある種の緊張関係が存在した、という(前掲書)。

この記述を読んだとき、CDに収録された山鹿氏の芸の背後にある、独立独立というような迫力の意味を再確認するとともに、私自身がフィールドとしてきた、宗教者たちの世界との呼応関係に、あらためて驚いてしまった。

私は、二十年ほど前から、高知県香美郡物部村(現在は香美市物部町)の民間祈禱師である「いざなぎ流太夫」の調査・研究をしてきたが、いざなぎ流の太夫たちもまた、師匠から弟子へという関係で、その祈禱法を継承している。彼ら太夫たちは、一人の師匠について祈禱法を習い覚えるのだが、それは決して固定したものではなく、一人の太夫が複

数の太夫を師匠とする例が少なくない。それは多数の師匠をもって複数の祈禱法を習得していることが、より腕前のよい太夫とされるからだ。だが、その場合、師匠となったものは、自分の技や知識をすべて弟子に授けているかという点、じつは彼らの世界にも「出し惜しみ・教え惜しみ」があったようだ。とくに自分の「奥の手」となる技(調伏法)に関わるものは、最後の最後になるまで弟子に教えないという。したがって、某太夫は、調査者である私の側の情報から、その師匠格の太夫の知識・技を確認したり、また師匠格の太夫の知識を書き記した私の著書そのものが、師匠太夫の知識を得るテキストになったりしたようだ。

また彼らは、師匠の生前はきちんと教えに従っているのだが、師匠の死後は、師匠から習ったことも、すべて自分自身が編み出した

かのように語り始めることもあるという。あるいは、師匠格の太夫の悪口を言い始める者もいる。祈禱師の世界であるいざなぎ流も弟子と師匠の関係は、つねに緊張に満ち、シビアな関係であったのだ。このことは、いざなぎ流が、最終的には「一人一流」といったような、独立した祈禱実践者の世界であることも通じていよう。

あらためて、琵琶弾き座頭という「芸人」の世界が、その芸・技の習得・伝承という面においては、いざなぎ流太夫という祈禱師たちと、似ていることを知ることができよう。それもまた、彼らが、芸能者や宗教者という近代的な区分とは異なる世界を生きている住人であったこととクロスする。かくして、本CDに収録された山鹿良之氏の語り芸の世界は、「平家」の中世的な演唱実態を求めていた兵藤裕己にとつての、重要な現場であったことを再確認できるのである。

DISC3の「あぜかけ姫」のあと、琵琶の演奏だけのインストルメンタル(器楽曲)が続く。肥後琵琶の、腹の底に響くような重みのある楽器の響きが鳴り続くうちに、山鹿良之氏の芸の世界は、終わっていくのである。(さいとう・ひでき/佛教大学)